

地震対策 – 耐震評価における余裕の考え方 –



ワーキングの詳細
はこちらから

論点No.10

設備の耐震評価結果を見ると、地震によって設備にかかる力（発生値）と許容値がほとんど一緒であり余裕がないように見える設備があるが大丈夫なのか。

第22回ワーキング
(2022.11.1) で議論

ワーキングチーム検証結果

耐震評価においては、発生値の計算条件を厳しく設定していたり、許容値を設定する際に余裕を見込んでいることから、発生値と許容値が近い場合であっても、実質的には一定の余裕を有していることを確認。

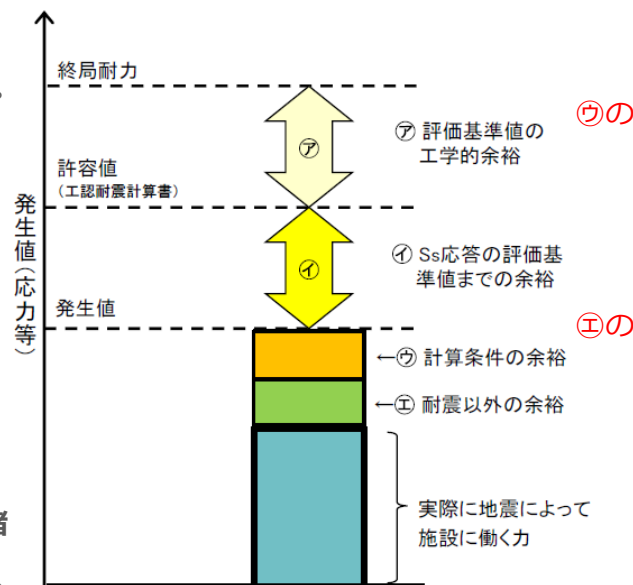
ワーキングチーム検証結果（抜粋）

○耐震評価において見込んでいる余裕

・耐震評価においては、以下のとおり、評価の様々な段階で余裕を見込んでいる。

- ㊦ 耐震設計時の判定の基準となる許容値は、実際に設備が壊れる限界値に対して余裕を持たせた値を設定
- ① 許容値と発生値の差分の余裕
- ㊥ 地震によって設備にかかる力を計算する過程で、計算条件の設定を厳しく設定
- ㊧ 耐震以外の条件や計算手法をより厳しく設定

・以上より、発生値と許容値がほとんど一緒の場合（①の余裕がない）であっても、㊦、㊥、㊧により一定の余裕を有している。



耐震評価において見込んでいる余裕のイメージ

評価の流れ（原子炉格納容器の座屈評価の例）

